

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回)日発行  
平成十八年二月一日発行(第百九卷第二号)

# ホトトギス

二月号



# 俳句随想

二百八十四

汀子

次のような葉書を頂いた。

「……前略。……中略。」

所で○月○日の『朝日俳壇』第一句にご選句の

稲刈りて名もなき草に日の当る

の選句について、いささか疑問があります。確かに、一般に雑草を『名もなき草』と言いならわしていることしばらくですが、有名な昭和天皇のエピソードに側近が『名もない草が……』と申し上げましたら、生物学者の天皇が『この世の草のほとんど全部にすべてもう名がついているのだから、そういう言い方はしない方がいい……』と仰られたということがあった。句の世界の用語と、現実社会とは少々違うことは小生も少し駄句を作りますので知ってはいますが、やはり朝日の冒頭にくる句ではないと存じます。……以下略」

私はこの句の「名もなき草」がいいと思って一句目に置いた。俳句は詩である。どの様な表現でも詩情が深ければ可とし、詩情を感じない生（なま）の言葉は没にする。生物学ではそうかも知れないが、「名もなき草」はまことに詩情の深い言葉である。

# 旬日記 汀子

平成十七年二月二日 ロイヤル俳壇

鳥の来てついでにばむ雪間ありそめし  
体調をととのへてゆく睡月かな  
皆雪の深さをいうてゆく授業  
風邪心地 鑑ふ心を失ひし

二月五日 芦屋ホトトギス会

浅き春より抜け出して来し句会  
ほほけんとして露の臺なしりかな

二月六日 関西野分会

春時雨こぼせし雲の行方かな  
晴れさうに晴れさうに春時雨かな  
雛菊に視線落して駅を出る

二月六日 下萌句会

薄氷や太陽のなき一日過ぎ  
猫柳川原に下りてみることに  
紅梅の庭と呼ぶる日も近し  
ダイヤモンドダストとはこれ雪の朝

一月七日 ロイヤル俳壇

雛菊を植えて旅がちなることも  
立春といふ心添ひ来たりけり  
二月八日 大阪倶楽部  
春寒といふ枷持ちて来し出先

消息を聞き春寒き一日かな

春寒に咲かせる工夫あることを  
積るより解くる早さも春の雪

二月八日 綿業倶楽部

鶯に忌日の心近づけて  
確かめし消息なりし冴返る  
雨止みて夕べとなりぬ冴返る  
みよしのの鶯と知るなまりあり

二月十日 清交社

盆梅の日を恋ふ心見えそめし  
猫の恋猫好きの猫物語  
稿債の今宵一人に猫の恋

震災の記憶にバレンタインの日  
その中に庭に下ろせし盆梅も

盆梅に過ぎ易き日々ありにけり  
猫の恋どころではなし猫御殿

二月十五日 有恒倶楽部

魁けてぬし紅梅の一部分  
午後よりは雨の予報や露の臺  
五周年記念紅梅より目覚め

二月十五日 無名会

これより季節のはざま春時雨  
雨降れば濡れて余寒に捉はるる  
一枚の川原の日向猫柳

稿債の増ゆるばかりの余寒かな

目の前の卓に活けある猫柳  
誰彼の欠席やはり春の風邪  
猫柳活けて午後より雨となる

二月十六日 夏潮句会

雨止んでほのと春めく夕べかな  
湖面吹き渡り来し風義仲忌

雨降りて猫の恋路もなかりしと  
義仲忌知るも知らぬも行き合へる

盆梅の緑萼の白まだ蕾

雛飾りたる一面のありどころ

二月十九日 倅 粟津松彩子様

冬帝を企うなはれたる如くにも  
現役を企うなはれたる如くにも

二月二十四日 きさらぎ会

紅梅に色の濃淡咲く遅速  
春の雪予報の出先ありにけり

木の実植う育つ未来のあることを  
紅梅を離れぬ鳥の枝移り

紅梅の古木の紅の新しく  
二月二十五日 時雨句会

春寒や今日の仕事は今日終へて  
春寒をいとはずに来て下されし

不用意に出て春寒を口にせず  
阿蘇の野を焼く日待たるを旅仕度

風の出で野焼中止の布令走る  
玻璃越に春寒の人通りけり

二月二十七日 野分会

寄せ植えてデージー色となりけり  
いくたびも春の時雨に遇ふも旅

又窓を見て滞在の時雨  
春の雪より抜け出して来たるかと

# 廣太郎句帳

廣太郎

人よりも春めいてゐる太典氏

二月十七日 登高会

二月五日 吉村ひさ子様高崎市文化賞受賞祝賀会

肝つ玉母さんめきて猫の妻

上州は第二の故郷 祝ぎの春

絵踏せし人の子孫といふ司教

二月七日 俊英句会

恋猫の戻りて家族夕餉かな

喪心を解きて二月礼者かな

絵踏せし人に奉行の安堵顔

寒明の句座新しき句敵も

二月二十日 若水会

猫の恋銀座路地裏六丁目

バレンタインデー貴方とはもうこれで

一月十日 土筆会

冴返る聖堂クレド和してをり

風花や開館の日を目裏に

黄梅の色に弾かれぬる羽音

言の葉を選びてバレンタインデー

二月三日 蕉心会

口尖るより冴返る話など

気がつけばバレンタインの日も終り

二ヶ月やビルの解体又一つ

二月十五日 草木瓜会

山茱萸の花孤高とも孤独とも

この風が碧梧桐忌を近づけて

塀の上とは恋猫の修羅場かな

二月二十三日 目黒学園句会

春近き香をもろともにカレーパン

君の香と梅の香りを纏ふ僕

麦踏や足裏に地球感じつつ

温む水使ひ切つたる嵩であり

恋猫に屋根明け渡したる旧家

海苔舟の四十五度といふ手練

春隣水は明日へ流れゆく

漆黒に恋猫の声尖りたる

海苔粗朶を頭上に飛機の離陸せり

節分の鬼役今日は免れて

明暗を分け猫の恋人の恋

麦を踏む男二人に背を向けて

# 雑詠

## 廣太郎 選

居る筈もなき妻横に夕端居 八王子 原 三猿子  
 独楽として命のあらたなる木の実 同  
 九十二の乾杯ビール飲めずとも 同  
 阪神の優勝迫る良夜かな 狭山 大久保白村  
 糸瓜忌や阪神愛す一詩人 同  
 巨人軍練習場の赤蜻蛉 同  
 恐竜の生きし世遠く蚯蚓鳴く 大阪 蔦 三郎  
 風が打つ 芒芒が打つ 芒 同  
 望月をほつたらかして人逝きぬ 同  
 はまばうや里富士望む川べりに 福岡 松尾緑富  
 里富士を背にはまばう咲く川辺 同  
 我が町にはまばう群生あらうとは 同  
 句座端折り子供神輿を見下ろしぬ 姫路 桑田青虎  
 落し文几帳面なる性と見し 同  
 マロニエの実なりしパリー土産とす 同  
 新弟子は次男でありし松手入 神戸 山田弘子  
 嵐来る方へ秋夜の列車発つ 同  
 台風の後に残りぬる白き海 同

秋立つと水にも力あるごとし 熊本 岩岡中正  
 秋風の吊橋雲を踏んでゆく 同  
 吊橋の天上天下秋の風 同  
 高原の風を濡らして霧走る 大阪 塙 告冬  
 星見つけたるより高原冷やかに 同  
 初紅葉櫛と名のつてをりにけり 同  
 蒼穹の透明にして伊賀の秋 同  
 深秋を肯うて待つ 翁像 樺原 稲岡 長  
 秋風に色あらば伊賀の水の色 同  
 秋声や我が目我が耳突き出せり 香川 湯川 雅  
 色草を摘めば野の息途切れたる 同  
 芝起伏コスモス起伏風起伏 同  
 蟬の穴まづ歪みては地震来たる 東京 坊城俊樹  
 ところてんすすりどこかをまさぐりぬ 同  
 僧一人しづかに老いて毛虫焼く 同  
 沈黙にジャズすべり込む秋の宵 群馬 木暮陶句郎  
 雨音のオルゴールめく十三夜 同  
 秋霖にプラチナ色の軒雫 同  
 青春の音立て林檎丸かじり 明石 涌羅由美  
 プロ野球佳境に入り子規忌かな 同  
 弾む曲次々流れ運動会 同  
 万物の輝き失せる月明り 秋田 浅利恵子  
 満月の懐にある大東京 同  
 満月や羽田空港小さく見ゆ 同

# 雑詠句評（二月号より）

中正・葉・芳子  
むつみ・憲明・千鶴子  
美奇・忠彦・明倫  
静龍・保佳・廣太郎

## 夕焼の燃えつきさうな小学校 神戸 山田弘子

夕焼が「燃えつきさう」と直感したところが面白い。それほど印象的な火の色である。「燃えつきさうに」元気な少年期が、一句の中に詠み込まれている。

これは少年期の原風景で、夕焼に染まるワンシーンを通して、作者の記憶はたちまち少年期へタイムスリップ。この郷愁もまた、共感できる。つまりは、「夕焼」の季節がよく生きているのである。虚子に「夕焼の雲の中にも仏陀あり」の句がある。これは、い

かにも拝みたくなるような夕焼の静諦（せいひつ）をよく詠んでいるが、掲句はこれと対照的に、小学校に飛び火しそうな、ダイナミックな夕焼を詠んでいる。「燃えつきさうな」と直感した作者の心も、常に「燃えつきさう」に躍動しているのである。

（中正）

大都会ではなく、自然豊かな中にある校庭も広い小学校を想像する。太陽もくつきりしていて、夕日もさぞ大きく見えるのだろう。そんな「夕焼」がダイナミックに目の前に迫ってくる句である。何といても「燃えつきさう」という表現が、この句をより迫力ある作品にしている。（廣太郎）

## 虚子在りし秋簾の中に戦避け 東村山 村松紅花

一読、タイムスリップして戦時疎開時代の小諸虚子庵が眼前に現出する。虚子庵の色褪せてやや疲れた感じの秋簾の中には、鎌倉から戦火を避けて疎開しておられる虚子先生がましますのである。その地にあつて虚子先生に師事し、虚子先生を守り支えたお一人である作者ならではの回想の句で、秋簾という季節が見事に詠まれた心持のふかい句である。（葉）

戦争中虚子が使っていた「秋簾」は今でも小諸に残っているのだろうか。作者は実際その時代に虚子と一緒にその簾を見た事があるのだろうか。虚子という偉大な師とともに過ごした自身と、そして「秋簾」を通して作者の虚子、ひいては花鳥調詠に対する信念が伝わってくる。（廣太郎）（以下略）

天地有情

子選

壁深く晩夏の雪を抱く穂高 金沢 藤浦昭代  
 梓川 岩魚 さ走る水 掬ぶ 同  
 龍野 浅井青陽子  
 諷詠のこころゆたかに子規祀る 同  
 熊本 岩岡中正  
 清貧のこころ深めて秋灯下 同  
 熊本 岩岡中正  
 残暑なほ鞭のごとくにありにけり 熊本 岩岡中正  
 もうひとつ残暑の会議待つてをり 同  
 相模原 木村享史  
 夏炬燃ゆ虚子に学びし日も今も 同  
 手花火に集まつて来る下駄の音 同  
 神戸 後藤比奈夫  
 団扇手に踊の振りを思ひをり 同  
 踊下駄なり軽すぎず重すぎず 同  
 吹田 宮崎 正  
 緑守り海鎮めんと那智の神 同  
 立待の月黎明の日と対す 同  
 仙台 小島左京  
 師の一句遺墨となりし秋扇 同  
 草の花嘗て美田と誇りしに 同  
 長岡 安原 葉  
 朝の日のとどきははじめし露時雨 同  
 豊中 瀧 青佳  
 変幻の天地有情雲と月 同  
 秋の夜は分厚い本が頼もしい 同  
 朝涼や先づ存問を天地に 同

うす雲にやさしくなりし月の面 東京 今井千鶴子  
 月よりの声ある如く芒生け 同  
 湯街の灯うるみて雨の十三夜 同  
 木暮陶句郎  
 野分過ぐ野の彩りを組み替へて 同  
 阿波といふ天地踊つてをりにけり 東京 稲畑廣太郎  
 指先に熱気放ちて阿波踊 同  
 樞原 稲岡 長  
 未枯の野に腰下ろし石ぬくし 同  
 茶の花に約束のごと雨来る 同  
 石狩の砂丘花野に年尾句碑 熱海 嶋田一歩  
 コスモスや空広かりし札幌市 同  
 眼鏡無いと云ひすぐ見つけ糸編む 同  
 嶋田摩耶子  
 育てゆく物ある幸や糸編む 同  
 露けしや琵琶湖一望ならずとも 同  
 姫路 桑田青虎  
 近江富士露けきさまに遙かなる 同  
 福岡 松尾緑富  
 虫の音に耳貸しをれば寝付きよく 同  
 風呂に入る夜毎の虫を聞きながら 同  
 佐比売野の夜涼長くは歩かれず 同  
 福山 竹下陶子  
 月よりも星の涼しき三瓶かな 同

# 天地有情句評

汀子

夏炉を囲んで学んだ日の事とその後の夏炉と虚子を垣間見る。

団扇手に踊の振りを思ひをり 神戸 後藤比奈夫

舞の名取でもあつた亡き夫人への思い出に繋いで行く団扇。

立待の月黎明の日と対す 吹田 宮崎 正

十七日の月が沈むとき、東の空から朝日が昇つて来た瞬間。

草の花嘗て美田と誇りしに 仙台 小島左京

休耕田となった嘗ての田圃が今草の花におおわれている。

変幻の天地有情雲と月 長岡 安原 葉

雲の多い夜空を渡る月が出入りを繰返す情景を天地有情と見た作者。

秋の夜は分厚い本が頼もしい 豊中 瀧 青佳

灯下親しむ秋の夜の過ごし方を今も読書に使う。分厚い本なら一層楽しみである。(以下略)

三千米級のアルプスの晩夏が見事に描けている句。

農深く晩夏の雪を抱く穂高 金沢 藤浦昭代

清貧のころ深めて秋灯下 龍野 浅井青陽子

覆籜と歳を重ね謙讓な心を失わない作者の生きる道。

残暑なほ鞭のごとくにありにけり 熊本 岩岡中正

自然の厳しさを甘受し耐える作者の姿勢が美しく描けた。

夏炉燃ゆ虚子に学びし日も今も 相模原 木村享史